

文化 第79巻 第1・2号 一春・夏一 別刷  
平成27年9月25日発行

## 互換性から見た「的」と「性」の接辞性

曾

睿

## 互換性から見た「的」と「性」の接辞性

曾 睿

キーワード：「～性」「～的」 互換性 属性規定 品詞変換機能 接辞性

### 1 はじめに

従来の研究では、「性」と「的」が同じ複合字音語基<sup>1</sup>（本稿では「複合語基」と略す）と結合する場合が多くみられ、「的」は相言類<sup>2</sup>を作る（例えば「外向的」）もの、「性」は体言類を作る（例えば「外向性」）ものであると言われている。

しかし、「性」は複合語全体を体言化するものの、相言類に相当する場合もあると言われている。相言類に相当するというのは、「～性」が「の」をとり（あるいはそのまま）、体言類（あるいは名詞）を修飾する際、その体言類（あるいは名詞）の性質を規定する用法を持つことを指す。例えば、「暖地性のシイ・カシ林」「停滞性の気圧」「萎縮性胃炎」など。さらに、「外向性の人」と「外向的な人」のように、「～性」と「～的」は同じく「人」の性質を規定していると思われる例がある。つまり、相言類に相当する「～性」には「～的」と似通う点が存在する。

しかし、従来の研究は「性」と「的」の文法的機能の対立に注目するものが多く、両者の似通う側面に関する論述はほとんど見られない。したがって、「性」と「的」の関係性については、まだ十分に解明されていないと言える。そこで、本稿は「性」と「的」の三字漢語の語構成における意味と機能を、差異だけでなく共通性をも視野に入れて比較・分析し、両者の関係の全体像を明らかにすることを目指す。

## 2 先行研究とその問題点

### 2.1 先行研究

「性」と「的」それぞれの語構成を分析する研究は、大きく分けて二つの側面から進められてきた。一つは、「性」と「的」のそれぞれが、複合語の品詞性をどのように変換するかという文法的機能にかかわる側面からの考察である。もう一つは「～性」の連体修飾語となる場合の位置づけに関する研究である。両者の先行研究の論述を概観する。

#### 2.1.1 品詞性変換機能について

先行研究では、「的」については複合語基の品詞性を相言類に変換するという点に関しては一定であるが、「性」については体言類に変換するか、相言類に変換するかに関して、異なる見解がみられる。

a) 「性」と「的」を同じく相言類に分類するものの、三字漢語「～性」は体言類となる場合があるとするのが野村（1978）である。

野村（1978）では「的」と「性」を同じく「相言型の語基」に分類している。相言型の語基というのは、1) 基本的に「…のヨウス」・「…ラシサ」といった意味を備えるとともに、結合形全体を形容動詞の語幹相当に変える特徴を持ち、2) 三字漢語は「～の / な」という形で体言を修飾することが多く、その場合、被修飾語の性質を説明する（連体修飾語の）働きをするものである。しかし、同時に全体として「的」は「～的ナ」という形を取って連体修飾語になる場合が多いのに対して、「～性」は「ガ / ヲ」という格助詞をとる体言型である場合と、「～性の」という形で連体修飾語になる場合があることを指摘している。

また、複合語基と三字漢語「～性」の品詞性を比較すると、用言類と相言類は「性」と結合して体言類を形成し、体言類は「性」と結合して相言類を形成する、という傾向がみられるため、「性」の機能は複合語基の品詞性を変える点にあるという<sup>3</sup>。つまり、「性」の品詞性変換機能は一定ではない。

b) 「性」は体言類と相言類両方の性質を持つものとするのが荒川（1986）である。

荒川（1986）は、「性」には体言類と相言類両方の性質があり、複合語基については体言類と用言類の場合があり、三字漢語については体言類と相言類の両方になる場合があると述べている。「～性」のうち直接あるいは「の」をとって他の連体修飾成分になる不安定な類に限り、「～性」を相言類に入れている。

c)「性」は体言類化する機能を持ち、「的」は相言化する機能を持つとするのが水野(1987)である。

水野(1987)では、基本的に「性」は複合語基の品詞性を体言化する機能を持つ接辞であり、「的」は複合語基の品詞性を相言化する機能を持つ接辞であると述べているが、一方、a)の野村と同じ、「性」には、体言類・用言類の語基と結合して結合形を相言類にする機能もあり、「的」と微妙な意味の違いを表し分けることがあること(例えば、「金属性の調理器具」と「金属的な声」)を指摘する。

以上の三つの先行研究をまとめると、「的」は複合語基の品詞性を相言類に変換するという品詞性変換機能を持つが、「～性」は自立用法である場合は体言類であり、連体修飾語になる場合は相言類に相当するため、「性」の品詞性変換機能は一定ではないと見られる。

### 2.1.2 連体修飾語になる場合の位置づけ

前節では、「的」と違って、「性」の品詞性変換機能にはゆれがあると指摘した。その品詞性変換機能のゆれの原因は「～性」の連体修飾語になる用法の捉え方にある。本節では、その「～性」の連体修飾語になる用法に関する記述を概観する。

A)「～性」は被修飾語の性質を説明する働きを持つため、体言類から分離する立場に立つのが野村(1978)・水野(1987)である。

野村(1978)によれば、「体言型」の連体修飾は被修飾語の所属や状態を表す場合に限られるが、「相言型」の連体修飾は被修飾語の性質を説明する働きをもつという点が違うという。「～性」は基本的に「相言型」に属するが、格助詞を伴い、自立する場合は「体言型」である。ただし、「の」を伴うと「相言型」と同じように被修飾語の性質を規定する機能を持つと述べている。

水野(1985)は野村(1978)の「連体修飾語になる」場合の用法を「連体用法」、それ以外の用法を「体言用法」とする。ただし、ここで言う「連体用法」とは、「熱帯性海水魚・金属製の調理器具・植物性タンパク」のように、被修飾名詞の属性を表す用法を指し、同じ「～性の」という形でも、「人間性の回復・党派性のゆえに」などは「体言用法」とした、と述べている。また、量的調査<sup>4</sup>の結果として、「連体用法」は「体言系」・「用言系」・「結合形態」との結合にみられるが、量的にはそれほど多くないこと、連体用法と体言用法の間には相補的な関係<sup>5</sup>があること、ただし、それは絶対的なものではない<sup>6</sup>こ

と、を指摘している。

B) 基本的には「～性」を体言類に捉えるのが加納（1991）・曾（2015）である。

加納（1991）は「～性」の連体と結合用法にしか使われないものを特別な体言類（名詞）として扱っている。

曾（2015）では、格助詞を伴い自立する「～性」と連体用法しかもたない「～性」を考察し、「性」は「性質（特徴 / 特有の特徴）」という意味を表し、本質的に体言類（名詞）を作る体言類の接辞性字音語基<sup>7</sup>であると指摘した。そして「～性の＋名詞」という連体用法を有する「～性」に関しては、1）連体用法のみの「～性」（例：「南海性の魚」）、と2）自立用法と連体用法をもつ「～性」（例：「即効性の神経剤」＝即効性を有する神経剤）の二種類があり、前者1）は後接する名詞の属性を規定する（属性規定）のに対して、後者2）は後接する名詞との格関係を規定する（関係規定）ものであること、また、1）の場合は相言類と近い機能をもつことを述べた。

## 2.2 問題点

前節では「性」と「的」の品詞性変換機能と「～性」が連体修飾語になる場合の位置づけに関する先行研究を概観した。それを承け、本節で以下の二つの問題点を提示する。

**問題点1 「～性のN」という連体修飾となる「～性」は相言類に入れられるのか。**

**問題点2 「～性のN」という連体修飾となる「～性」は「～的（な）N」という連体修飾となる「～的」と同じであるか。**

以下で、それぞれの問題点について検討を加え、本稿での考察の基礎とする。ただし、問題点に入る前に、先行研究で使用する用語を整理し、それに対応する本稿の用語を提示する。

### 2.2.1 用語の整理

本稿で対象となる「被修飾語の性質を規定」する「～性」の具体的な認定基準に関して、先行研究では具体的な説明はされていない。そのため、本節では、先行研究で使われる用語の説明とその問題を整理し、「被修飾語の性質を規定」する「～性」に対する本稿の新たな名称を提示する。

#### I 野村（1978）の「連体修飾語」について

野村（1978）には、「 $A^8 + 性$ 」の場合は、「～性ノ」という形で、連体修飾語になる傾向が強い、「ただし、 $A + 性$ でも、「人間－性」,「将来－性」のよ

うに、連体修飾機能を持たないものもある」、「C＋性」でも、「移動性の高気圧」、「耐熱性ガラス」のような用法があり、」という記述がある。

つまり、「～性のN」において、「性」は「連体修飾機能」を持つ「連体修飾語」であり、「～性」と被修飾語の間には「の」がある場合もない場合も同一視している。

## II 水野（1985）の「連体用法」について

水野（1985）は野村（1978）の「連体修飾語になる」場合の用法を「連体用法」、それ以外の用法を「体言用法」とする。

## III 本稿の「規定用法」について

野村（1978）では、「性」を「相言型」に入れているため、それが連体修飾語となる場合は全て被修飾語の性質を規定すると考えている可能性が高いが、その点について明確な説明はされていない。そのため、野村（1978）に従った水野（1985）は、「人間性の回復・党派性のゆえに」などを「体言用法」に入れると明言しているが、「回復」は純粋な体言類（名詞）ではなく、いわゆる動名詞である。「人間性の回復」は「人間性を回復すること」という解釈になるため、「人間性」は体言用法と同じである。そして、「党派性のゆえに」の「ゆえに」は接続詞であり、「党派性」も体言用法である。しかし、被修飾語が完全な体言類である場合について言及していない。このように見てくると、「～性のN」の「～性」と被修飾語との間は性質（属性）を規定する以外の関係を持つ場合も充分に考えられる。

曾（2015）では、「～性」は被修飾語の属性を規定する属性規定（「～性であるN」という意味関係を持つ）の場合、と被修飾語との間に格関係をもつ（「～性が有するN」、「～性を有するN」という意味関係をもつ）関係規定の場合と二分した。つまり、被修飾語Nが純粋な体言類である場合でも、「～性」が属性規定をしないことがある。

本稿では、「～性のN」という連用修飾する場合の中でも、「～性」が属性規定をする場合を、「～性」の「規定用法」と呼ぶ<sup>9</sup>。ただし、先行研究では、「の」を取り修飾する場合と直接Nにかかり修飾する場合を区別していない。それに対して、本稿では、規定用法を「～性のN」の「介入用法」、「～性N」の「結合用法」という二つの用法に分ける。（以下、先行研究を記述する場合は、それぞれの用語を使うことにする。）

というのは、「の」の介入があってもなくても、被修飾語の性質を規定する

という点では違いがないが、データでは両方の形態を有する「～性」と一方の形態しか有さない「～性」があるため、それらも区別する必要があるためである。

## 2.2.2 「～性のN」は相言類に入れられるか（問題点1）

先行研究では、自立用法となる「～性」を体言類とする点では共通した見解を示している。その場合、「性」が複合語全体（本稿では三字漢語を指す）を「体言化」とするという機能を持つことは間違いない。ただし、それが、連体用法として使われる際に様々な問題がある。

2.1.2 節からわかるように、「～性」の連体修飾語になる際の位置づけについては、「～性」が体言類であるか相言類であるかという点が重要な論点となっている。その問題に対して、野村（1978）は「体言型」の連体修飾は被修飾語の所属や状態を表す場合に限られるが、「相言型」の連体修飾は被修飾語の性質を説明する働きをもつという点が違うということ、および「～性」は格助詞を伴い、自立する場合は体言類であるが、「の」を伴うと相言類と同じように被修飾語の性質を規定する機能を持つと述べている。しかし、自立する用法を持つ体言類の「～性」は連体修飾語となると相言類になってしまうのか、という点も重要な問題であると思われる。また、「性」の品詞変換機能が「体言化する」ことであるか、「相言化する」ことであるかは「～性」の連体修飾するものをどのように捉えるかによって異なるのである。

また、先行研究では、連体修飾語になる「～性」は基本的に自立用法を持たないという点が「～性」を相言類に入れる理由の一つであると考えられるが、本稿の調査データを見ると、野村（1978）、荒川（1986）、加納（1991）で相言類とされる「移動性（の）（高気圧）」<sup>10</sup>の「移動性」については、「成虫は移動性が著しく、秋には多数の個体が同方向へ飛翔する。」（KOTONOH 現代日本語書き言葉均衡コーパス）（略称：BCCWJ）よりという自立用法が見られた。そのほか、「金属性（の調理器具）」「先天性（疾患）」なども自立用法が見られる。従って、被修飾語の属性を規定する連体用法を持ち、自立用法も有するものがあるとわかる。その場合、両用法における三字漢語（「移動性」）の意味はさほど違いがない。このように考えると、「移動性」のような三字漢語「～性」は体言類であるか相言類であるかが明確に言えなくなる。さらに、この場合の「性」の品詞変換機能をどのように規定するのが問題となる。

曾（2015）では、連体用法しかもない「～性」を考察した結果、後接する

体言とは「属性規定」という関係であり、相言類に近いと指摘した。それに対して、自立用法を持つ「～性」の連体用法の場合、「～性」は後接する体言とは「関係規定」となり、明らかに体言類であるとした。しかし、「伝染性が(強い)」の自立用法、「伝染性の疾病」の連体用法、「伝染性疾患」の結合用法の全部を持つものに関しては言及できなかった。

以上の分析から、「～性」は格助詞をとり自立するか、「の」をとり体言類(名詞)を修飾するかによって、品詞性が全く異なるとする先行研究の指摘には曖昧性があり、「～性」が自立する用法も体言類(名詞)を修飾する用法も持つ場合、「～性」の品詞性が混乱してしまう可能性がある。したがって、体言類(名詞)を修飾する際、「～性」は本当に「相言類」と判断してよいのかが問題である。

### 2.2.3. 「～性のN」型の連体修飾語である「～性」と「～的(な)N」型の連体修飾語である「～的」は同じか(問題点2)

連体修飾語になる「～性」は体言類と異なる性質をもつが、相言類と同じであるかどうかということも明らかにされていない。それを考えるためには、完全な相言類である「～的」との比較が有効であると思われる。

野村(1978)では、体言類に属するものの中でも、連体用法として使われる際、相言類と似ている場合があると指摘されている。例えば、「経済上の問題」を「経済的な問題」といいかえても、あまり、違いはなさそうであるが、「経済的な生活」を「経済上の生活」と言い換えることはできない、と述べている。

しかし、「経済上の問題」は「経済における問題」であり、それが「経済的な問題」に言い換えられるのは「～的N」にも「～におけるN」という意味関係があるためにすぎない。一方、「経済的な生活」というのは、「費用や手間などがかからない生活」であり、それは「経済的な問題」における「経済的」の意味と異なるため、「経済的な生活」を「経済上」で言い換えられないのは当然なことである。さらに、「経済上の問題」が、「経済的な問題」に言い換えられるなら、「経済上」は相言類と同じような「名詞の性質を規定する」機能を持つことになるとと思われるため、「～性」と「～的」の類似性と同じになるのではないか、「経済上の問題」における「経済上」も相言類に近いと認めるべきではないか、という疑問が生じる。

それに対し、野村(1978)で被修飾語の性質を説明する働きをする相言類と



される「植物性（のマーガリン）」「移動性（の高気圧）」は「植物的（なマーガリン）」「移動的（な高気圧）」に言い換えることができない。同じく被修飾語の性質を説明する働きであるにもかかわらず、両者が言い換えられないのはなぜかという問題もある。それは、「～性」は一体どのような部分において相言類に近いのか、あるいは、逆に言えば、そもそも「性」は相言類に入れられないのではないかという疑問につながる。

以上二つの問題点（問題点1・問題点2）を、明らかにすることが、「～性」が相言類の用法を持っていると言えるのか、もし相言類の用法があるのであればどのような側面が相言類と同じであるかを明らかにすることになると思われる。

### 3 考察

#### 3.1 考察にあたって

本節では、前節の問題点を承け「性」と「的」の異同について考察する。まず相言類とされる「被修飾語の性質を規定」する「～性」の選定と本稿の分類基準を述べる。

##### 3.1.1 規定用法の認定

「～性」の規定用法を認定するために、ここでは、「NのN」の意味関係に関する詳細な考察を行った西山（2003）を参考にしたい。

西山（2003）は、「名詞句（NP1）＋の＋名詞句（NP2）」の「NP1」と「NP2」の意味関係に五つのタイプ<sup>11</sup>が存在すると述べている。その中、タイプA：NP<sub>1</sub>と関係Rを有するNP<sub>2</sub>、タイプB：NP<sub>1</sub>であるNP<sub>2</sub>、とタイプE：行為名詞（句）NP2と項NP1、の三つの意味関係のタイプが「～性のN」の「～性」と「N」の意味関係に見られる。例えば：「人間性の秘密」は「人間性と関係Rを有する秘密」（タイプA）であり、「習慣性の薬物」は「習慣性である薬物である」（タイプB）<sup>12</sup>である。そして、「定時性の確保」は「定時性を確保することである」（タイプE）である。西山（2003）によると、タイプBのNP1が叙述性を持つことが必要である。

つまり、連体修飾関係である「～性（の）N」は三つのタイプがある。

タイプA：宗教性の起源 共時性の現象 人間性の秘密

タイプB：老人性痴呆 外洋性の魚種 習慣性の薬物

タイプE：動作性テスト 定時性の確保

タイプ A と E の「～性」は曾（2015）で述べた被修飾語と関係規定に立つものに相当する。例えば、「宗教性の起源」（宗教性が有する起源）、「共時性の現象」（共時性という現象）など。本稿では、被修飾語の性質を規定すると思われるタイプ B に属する「～性」のみを規定用法とする。

### 3.1.2 「～的（な）N」の意味関係

前節では、「～性（の）N」の意味関係の規定を述べた。それに対し、本節では「～的（な）N」の意味関係に関して、山下（1990）を引用する。

山下（1999）は、日本経済新聞の CD - ROM 資料に基づいて「～的」の意味と機能を以下の三種類に分類する。

- 1) 「～的」は前接語 A の表す属性概念が後接語 B を限定する役割を果たす。  
「A 的 B」は、B の属性が「A 的だと限定され、その基底の意味構造は「B が A の性質を有している」「B が A (の / する) 状態である」になる。(例): 「慢性的資金不足」・「階層的思考」・「普遍的安全保障」・「弾力的判断」・「本質的問題」
- 2) 「～的」は比喩を表す助動詞と同じような役割を果たす。従って、「A 的 B」は「A のような B」と言い換えることができる。(例): 「家族的雰囲気」・「教祖的存在」・「カリスマ的指導者」・「コンサルタント的立場」
- 3) 「～的」は、ある種の助詞や複合辞と同じ役割を果たす。「～的」が「A における B」、「A としての B」、「A についての B」、「A に対する B」など様々な意味を担っている。(例): 「時代的要請」（時代における要請）・「音楽的素養」（音楽に対する素養）・「基盤の防衛力」（基盤となる防衛力）

また、「～的」は典型的な相言類であるため、先行研究では、「～的な N」と「～的 N」を特に分けていない。また、「な」の介入は「～的」と N の修飾関係に大きな影響がないと思われるため、本稿は「～的な N」と「～的 N」を区別しない。

### 3.1.3 考察対象の選定

本稿の考察対象として、三字漢語（二字漢語＋性／的）を選ぶ。まず、KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（略称：BCCWJ）から「～的」の見出し語 2681 語、「～性」の見出し語 810 語を抽出した。それらの出現形態による語数の内訳を表 1 に示す。

表1 「～性」の出現形態による語数の内訳

出現 形態	自立 のみ	自立 連体	連体 のみ	自立・連 体・結合	連体・ 結合	自立・ 結合	結合 のみ	合計
語数	432	149 (33)	28	41	52	27	81	810

※（自立・連体用法の括弧内は「規定用法」の数）

「～性」の見出し語からタイプBの意味関係に属するものを取り出し、同じ複合語基である「～的」と互換できるかどうか、互換できない場合、意味の違いはどのようになっているかを考察する。

さらに、考察対象をそれらの「自立用法」「介入用法」「結合用法」の有無の状況によって、四つのグループに分ける。

- ①自立用法と、介入用法（あるいは結合用法）を持つ「～性」と「～的」
- ②介入用法のみ、或いは、結合用法のみの「～性」と「～的」
- ③自立用法・介入用法・結合用法すべてを持つ「～性」と「～的」
- ④介入用法と結合用法を持つ「～性」と「～的」

に分けて考察を行う。なお、「自立用法」のみの「～性」は完全に体言類であり、「～的」と互換できないため、対象としない。

## 3.2 分析

### 3.2.1 自立用法を持つ規定用法の「～性」と「～的」の互換性

本節では、自立用法を持ち、介入用法あるいは結合用法のどちらかがある「～性のN」における「～性」と「～的」との互換性を考える。自立用法と介入用法を持つ「～性」は33語であり、自立用法と結合用法を持つ「～性」は13語である。それらの複合語基を「的」と結合する用法があるかどうかをBCCWJで検索した。その一部を以下のように示す。

**例：**客観性の原理（客観的（原理／事実）恒常性の状態（恒常的な残業）

内・外向性の人（内・外向的な人）妄想性の精神病（妄想的幻想）

悲劇性の肉体表現（悲劇的な人生）恣意性の話（恣意的な調整）

特殊性の誤謬（特殊的部門）即効性の毒物（即効的（な）効果）

拡張性の頭痛（拡張的異議）爆発性の危険物（爆発的な行動力）

内在性の神経前駆細胞（内在的側面）変化性の矛盾概念（×）

和合性の愛（×）放浪性の戦略（×）明朗性の主張（×）

常習性便秘（常習的脅迫） 周期性気分変動（周期的変化）

活動性胃炎（活動的エネルギー） 内湾性魚（×）

吸水性スポンジ（×） 感光性樹脂（×）

以上の語例から、「～性」はさらに三つのグループに分けられる。①「～的」と同じ被修飾語があり、「～性のN」と「～的（な）N」との意味が似ているもの（例えば、「客観性」、「内向性」、「外向性」）。②被修飾語も異なるし、「～性」と「～的」の意味も全く異なるもの（例えば、「妄想性」「拡張性」「常習性」など）。①と②の「～性（の）N」と「～的（な）N」は同じ複合語基を有するが、③の「～性」と同じ複合語基となる「～的」がないもの（例えば、「変化性」「明朗性」「内湾性」など）。

まず、「～的」と全く異なる②から見てみる。「妄想性の精神病」は＜妄想するという性質（特徴）を持つ精神病＞であり、「妄想的幻想」は＜妄想に近い（のような）幻想＞である。「妄想性」は＜妄想という性質＞であり、「妄想的」は＜妄想のような＞という意味である。介入用法における「妄想性」と自立用法における「妄想性」の意味は同じである。「妄想性の精神病」という介入用法は「妄想性」が一つの属性として「精神病」を限定するという文法的な機能を果たすものである。それに対して、「妄想的幻想」の「妄想的」は「妄想に近い（或いは類似性を持つ）」という「幻想」の様態を描写するものである。「性」は「性質」という意味を持つことに変わりがない。それに対して、「的」は「のような」という複合語基との類似性を示す意味を持つが、具体的な意味を示すのは複合語基「妄想」であり、むしろ、「的」は複合語基と被修飾語の内容描写という関係を結ぶ機能の方が「のような」という意味より重要であると思われる。

次に、①の「客観性の原理」「客観的原理」のように、一見、「～のような」という「性」と「的」が互換できるものであるが、それらは同じではない。

例1：たとえば「客観性の原理」は、数少ない普遍的な規範理論のように思われるが、内実はそれほど単純ではない。なるほど政治家をはじめとしていわゆる「一般庶民」に至るまで、メディアは客観的でなければならないというテーゼを是認しているように思われる。（大井眞二（著）『現代ジャーナリズムを学ぶ人のために』）

例2：カントによれば趣味判断は客観的原理を欠き、ただ主観的な原理だけをもっている。（金田千秋（著）『芸術学フォーラム』）

例1の「客観性の原理」というのは「客観性がある原理」であり、例2の「客観的原理」は＜客観（的）である原理＞である。「客観性」は＜客観（的）という性質＞であり、「客観（的）」は＜客観（的）かどうか＞という意味である。「客観性」は「原理」の性質を規定する機能を持つものに対して、「客観的」はどのような「原理」かの描写である。山下（2001）の解釈で分類すると、「客観的原理」は＜客観（的）という性質を持つ原理＞という意味関係に属すると思われるが、「性質」という意味的要素が現れるのは「客観」が「原理」の様態（どのようなという性質）を説明するものであるためである。「客観」は結合類であり、自立することができないため、必ず「的」をつける必要がある。「的」は「客観」という内容を状態にし、相言類の機能を備えるためのものである。それに対して、「性」は「性質」という一定の意味を持つ。そのため、「客観性」が被修飾語の属性を規定するのは、その性質という意味が持たせたものであり、「客観的」は様態を表す相言類であるため、被修飾語の様態を描写することとなる。

また、③の「～性」は「～的」に互換できないため、「～的」と完全に異なるとわかる。特に、自立用法と結合用法の「～性」は②（13語）、③（14語）しかない。したがって、結合用法の「～性」は介入用法の「～性」より「～的」との違いが大きく見えるとわかる。

### 3.2.2 自立・規定用法の「～性」と「～的」の互換性

自立・規定用法（自立・介入・結合用法全部あるもの）の「～性」と同じ複合語基である「～的」は22語ある。以下はその一部と「～性」と対応できない「～的」の一部の語例を示す。

例：耐震性のダクトイル鋳鉄管 耐震性貯水槽（耐震的な配慮）

有機性の堆積物 有機性廃棄物（有機的組織体）

先天性の障害 先天性（の）小腸閉鎖症（先天的な脳障害）

化学性の炎症 化学性肺炎（化学的便潜血反応）

心因性の高血圧 心因性健忘（心因的要因）

拡散性の増殖因子 拡散性無酸素症（拡散的意識）

細菌性（の）食中毒 細菌性肺炎（×）

塩基性の水溶液（塩基性成分）（×）

吸収性の素材 吸収性縫合糸（×）

反応性の抑うつ状態 反応性うつ病（×）

### 伝染性の疾病 伝染性疾患 (×)

結合用法も持つ「～性」の多くは専門用語であると思われる。特に、医療用語が多くみられるのが特徴的である。それは「～性」が被修飾語の属性を限定するという機能を持つことと深く関わるとと思われる。それらは「性」の「性質」という意味を生かし、Nの様々な特徴から一つを取り出して、Nの種類を規定することにより、一つの専門用語となったと考えられる。それらの意味は自立用法を持つ「～性」と異なり、一定の前提（文脈或いは専門知識）が必要となる。例えば、「伝染性疾患」は＜伝染する可能性があるという性質を持つ疾病＞という解釈が必要である。それに対して、「～的」は被修飾語の内容（様態）を描写するものに限られている。

「～性」と「～的」の対照によって、このタイプは二つのグループに分かれる。①「～的」と類似する被修飾語があり、「～性のN」と「～的(な)N」との意味が似ているもの。例えば、「先天性」。②被修飾語も異なるし、「～性」と「～的」の意味も全く異なるもの。例えば、「耐震性」。

「先天性の障害」は＜先天性という属性を持つ障害＞という意味である。「先天性」は「障害」の一つの特徴であり、その原因でもある。それに対して、「先天的脳障害」は「生まれつきの(先天の)脳障害」であり、「先天」は「脳障害」の原因にしかねない。そこにそれらの意味における差異がある。

「耐震性のダクトイル鋳鉄管」「耐震性貯水槽」における「耐震性」はいずれも被修飾語の属性を限定するものである。「耐震性」というのは性質はダクトイル鋳鉄管あるいは貯水槽の一つの属性（機能）であり、「耐震性があるダクトイル鋳鉄管/貯水槽」という意味を表すのである。それに対して、「耐震的な配慮」というのは「耐震するかどうかに対する配慮」である。山下（1999）の分類で解釈すると、「耐震における配慮」という意味を表す。「性」は「性質」という意味を保つが、「的」は「ある種の助詞や複合辞と同じ役割を果たす」（山下（1999）の意味3）ことになる。つまり、「的」は複合語基と被修飾語の関係を結ぶための存在であり、意味の面における添加はほとんどない。

以上から、結合用法がある「～性」は自立用法の意味に基づき、被修飾語の性質を規定することにより、被修飾語との意味関係が派生したことがわかる。例えば、「先天性」は「障害」の原因になり、「耐震性」は「貯水槽」の機能になる。一方、「～的」は被修飾語の内容を規定するという働きしかない。したがって、両者は互換性を持たない。

以上の二節（2.2.1・2.2.2）が自立用法を持つ「～性」の規定用法について考察した結果をまとめると以下ようになる。まず、「～性」の意味という側面である。自立用法においても、規定用法においても、「～性」が表す「～という性質」という意味は同じである。その意味は相言類というより体言類に相当する。次に、「～性」の属性規定と「～的」が異なるという側面である。規定用法の場合、「～性」は被修飾語が有する性質の中から「～という性質」を取り出して、被修飾語の種類を限定する機能を果たす。「～的」は被修飾の内容（様態）を規定する機能と異なる。以上の2点をまとめると、「～性」は属性規定になる場合でも、自立用法として使われる場合と同じ意味を持ち、被修飾語の種類を限定することとなる。従って、「性」は体言類であるといえよう。

### 3.2.3 規定用法のみの「～性」と「～的」の互換性

本節は規定用法（介入用法あるいは結合用法）のみの「～性」と「～的」の互換性を考察する。

まず、介入用法のみの「～性」の「性」を「的」に入れ換え、BCCWJで検索した結果、「停滞性」1例だけに対応する「停滞的」が見られた。

例3：つまり、大規模で停滞性の気圧の谷が日本の東にあるときに発生するタイプである。（嶋村克（著）『天気の不思議がわかる本』）

例4：要するに、交流事業への取組みに関する限りは、壮年人口が小さな集落でも、寄合やその議題数、そして集落協定締結率で鮮明に見られた停滞的傾向は確認できないのである。（小田切徳美（著）『21世紀日本農業の基礎構造』）

例3の「停滞性の気圧」というのは、「気圧」の属性（種類）は「停滞性」である。「気圧」には様々な種類（例えば、ほかに「移動性の気圧」）がある中で、「停滞性を持つ気圧」を指す。つまり、「停滞性」は「気圧」の種類を規定する機能を持つものである。それに対して、「停滞的傾向」は「停滞するという傾向」であり、「停滞（する）」は「傾向」の内容（どのような「傾向」であるか）を説明するものである。「停滞性の気圧」の「停滞（する）」も「気圧」の内容（どのような気圧であるか）を説明するものであると考えることもできるが、それは「停滞（する）」の機能である。「停滞性」は「気圧」の状態を説明するのではなく、その属性（種類）を規定するものである。したがって、「停滞性N」と「停滞的N」とは全く異なるものであり、「性」と「的」は互換できない。



また、結合用法のみをもつ「性」(81語)の中で、「～的」と同じ複合語基の結合用法のみの「～性」は15語ある。

**例：**分子性結晶(分子的素材) 無機性汚泥(無機的現代建築物)

気息性嗶声(気息的自由リズム) 偏執性分裂病(偏執的観念)

交叉性麻痺(交叉的なつながり) 好気性微生物(好氣的生物)

吸汁性害虫(×) 潜伏性斜視(×) 埋在性動物(×)

以上の語例からみると、結合用法の「～性」は被修飾語の種類を限定するという機能を有することがわかる。例えば、「好気性微生物」は〈好気性である微生物(例えば、空気)〉であり、「好氣的生物」は単に〈好氣(的)という状態にある生物〉という意味である。両者のもっともの異なる点は、前者は一つの微生物の名前であり、後者は生物のある状態に対する解釈であり、特定の生物を指示しているわけではない。

以上をまとめると、介入用法のみ、或いは、結合用法のみの「～性」は被修飾語の一つの属性を表すというよりは、被修飾語が表す一つのカテゴリの下位概念を規定するという機能を有すると言える。それを本稿では「名づける機能」と呼ぶことにする。

### 3.2.4 規定用法の「～性」と「～的」の互換性

規定用法(介入用法と結合用法両方ある)の「～性」と同じ複合語基である「～的」は22語ある。その一部と「～的」に変換できない一部の語例を以下のように示す。

**例：**災害性(の)疾病 (災害的出来事)

動物性(の)タンパク質 (植物的生命)

老人性白内障 老人性のしみ (老人的出発点)

内因性(の)うつ病 (内因的障害)

外傷性の脳幹梗塞 外傷性脊髄損傷 (外傷的な側面)

低木性の陰樹 低木性果樹 (×)

湿地性の草 湿地性種 (×)

介入用法と結合用法である「～性」の多くは複合語基と被修飾語は同じものである。つまり、自立用法を持っていない「～性」の介入用法と結合用法の場合には大きな差がないということである。

**例5：**業務上の疾病の場合は、災害性の疾病(事故に起因して発生した疾病と職業性の疾病)(長期間にわたっての作業が影響して発生する疾病)の



2つに分けられます。(河野順一(著)『労働法のことならこの1冊』)

例6：(1) 災害性疾病 原則として、疾病の原因となる事故が唯一の原因である必要がなく、既存疾病などと絡み合う場合でも、いくつかの存在する原因の有力な一つであればよいとされています。(河野順一(著)『労働法のことならこの1冊』)

例7：業務起因性は、単に業務との因果関係一般を意味するのではなく、一定の明確な事由、すなわち災害ないし災害的出来事によって媒介された因果関係であり、業務と災害との因果関係および災害と傷病との因果関係という2つの因果関係によって構成されている、(西村健一郎(著)『労災補償』)

例5の「災害性の疾病」と例6「災害性疾病」は同じく「事故(災害)に起因して発生した疾病」という意味である。様々な疾病の中で、特に「災害が原因となる(災害性)」という疾病を限定するため、「災害性(の)疾病」を一つの特別な疾病として取り出したのである。それ対して、例7の「災害的出来事」は「災害のような出来事」である。災害という出来事ではなく、災害に近い(類似性を持つ)出来事を指している。「災害」は「出来事」の一つの典型例として取り上げられ、「災害的」は「それに近い(類似する)」という意味を表す。やはり、「災害的」は「出来事」の内容(様態)を描写するものである。

#### 4 「性」と「的」の互換性

前節では、①自立用法を持ち介入用法を持つ「～性」、②介入用法のみの「～性」、③自立用法・介入用法・結合用法すべてを持つ「～性」、④介入用法と結合用法を持つ「～性」、の四つに分けて、それらの「規定用法」において「性」が「的」に変換できるか、変換した後の意味が同じであることを考察した。本節では、その結果をまとめ、「性」と「的」の規定用法における特徴を比較する。

まずは2.2あげた問題点のうちの問題点2の解答から始める。「～性(の)N」という連体修飾の「～性」は「～的(な)N」という連体修飾である「～的」と同じものではない。その理由は二つある。

第1には、「～性(の)N」の「～性」は被修飾語の属性を規定するものであるが、「～的(な)N」の「～的」は被修飾語の内容(様態)を描写するものである。

自立用法を持つ「～性」が最も典型的である。「～性のN」の意味関係は「～という属性を持つN」となる。「～性」と「N」の間には所有関係が存在し、「を」格をとることが可能である。それは、「～性」はNが所有する複数の性質から一つを選び、Nを限定するという機能があるからである。たとえば、「移動性の気圧」（自立・介入用法ある）もあれば、「停滞性の気圧」（介入用法のみ）もある。「移動性」と「停滞性」はいずれも「気圧」の一種であり、それらは「気圧」を修飾することによって、「気圧」の種類が限定されるのである。その点においては、介入用法のみを持つ「～性」（例：停滞性の気圧）、だけではなく、自立用法を同時に持つ「～性」（例：妄想性の精神病）、介入用法・結合用法同時にもつ「～性」（例：災害性（の）疾病（災害的出来事））にも共通しているのである。しかし、自立用法を持たない用法は「名づけ」という性格がより強い。特に、介入用法・結合用法を持つ「～性」の多くは医療用語のような専門用語（例：停滞性の高気圧・災害性（の）疾病など）であり、被修飾語の属性を規定するより、その下位概念を構成する働きを持つ。

それに対して、「～的」は被修飾語の「内容を描写する」こととなる。例えば、「妄想的幻想」は＜妄想に近い（妄想のような）幻想＞であり、「妄想」は「幻想」の類似対象となり、その内容でもある。「停滞的な傾向」というのは単に、どのような傾向かを具体的に述べたものである。つまり、「停滞しような傾向」である。それらは被修飾語であるNの属性から取り出したものとしては考えにくい。そして、名づける機能を有する「～性」のような場合、単なる内容を描写する「～的」は言いにくくなる。さらに、「耐震的な配慮」のように、「的」は修飾関係を結ぶ働きしか持たない場合もある。

第2には、「～性」と「～的」が同じ語基であるものは四つのグループを合わせても88（うち「自立・介入／結合（28）」（グループ①）・「自立・規定用法（22）」（グループ②）・「介入／結合のみ（16）」（グループ③）・「規定用法のみ（22）」）語しかない。「～性」と「～的」の見出し語の語数からみると非常に少ない。さらに、「～性」と「～的」が極めて近いのは、自立用法を持つ「内向的」の介入用法（内・外向性の人（内・外向的な人））、介入用法と結合用法を持つ「先天性」（先天性の障害（先天的な脳障害））の3例しかない。その上、それらの例文をみると、意味に違いがみられるのである。

例9：一つの作業に集中する人は、外向的な人より内向的な性格の人が多いのではないだろうか。結果的に内向性の人と良い形の作品は相関があると

いう事になるのだろう。(福良宗弘(著)『茶の湯の心理』)

例9の「内向性の人」は「内向的な性格の人」であり、一つのタイプ化している言い方であるのに対して、「外向的」は「(ひとが) 外向的だ」という特徴を描写しているのに他ならない。

従って、「～性」の規定用法は意味の面からみても、被修飾語との意味関係からみても、「～的」と異なることがわかる。それらが似通うと見えるのは「性質」という限定が被修飾語の内容の描写にも成り立つからだと思われる。しかし、それは単なる内容を描写する「～的」とは異なるものである。

特に、自立用法を持つ「～性」の規定用法を見ると、規定用法における意味と自立用法における意味と全く同じである。このように考えると、先行研究において、自立用法の場合は体言類と認め、規定用法の場合は相言類に分類することは不合理であると言わざるをえない。

問題点2に対する解答は、同時に、問題点1については「～性のN」という連体修飾となる「～性」は体言類(名詞)の連体修飾であり、相言類に入れられないという解答を導くと言えよう。

以上の分析から、「性」と「的」の関係は以下のようにまとめられる。

i、「性」と「的」の連体修飾の内実が違うこと。

「～性」は「～という性質」という意味を持ち、被修飾語の性質を限定する機能を持つが、その限定は被修飾語の実際に所有する性質(特徴)から一つを取り出し、その修飾語の種類を規定する機能という内実を持つ。それに対して、「～的」は被修飾語の内容を描写することによって、被修飾語の性質を規定するという機能を有する。そのような根本的な違いがあるため、「～性」は規定用法においても、自立用法と同じように「～という性質」という意味を表すが、「～的」は複合語基と被修飾語の意味関係においては、様々な意味関係が考えられる。

ii、「～性(の)N」の一部が「～的(な)N」に似通うのは「性」が「性質」という意味を持つからであること。

「～性(の)N」と「～的(な)N」がなぜ似通う場合があるのかという点に関しては、それ「性」が表す「性質」という意味の特殊性が原因になる。三字漢語「～性」は「～という性質」の意味を表す場合、その「性質」を持つNを修飾すると、自然にその属性を規定する意味関係になる。したがって、「～的(な)N」の複合語基がNの所有する一つの性質である場合には、「～性」と

「～的」は似ているように見える。しかし、「～的」には種類を規定する名づける機能を持っていないため、被修飾語との意味関係は似通うが同じではない。

## 5 「性」と「的」の接辞性

前節で述べたように、被修飾語の属性を規定する「～性」と被修飾語の内容を描写する「～的」と、被修飾語を限定する際の意味関係は異なる。その違いは、「性」と「的」の接辞性（どのぐらい接辞に近い）にも深くかかわる。

まず、意味の安定性が異なる。「性」は自立用法においても、規定用法においても、「性質」という一定の意味を表す。従って、自立用法がある場合、「～性」の意味は自立用法と規定用法において同じである。それに対して、「的」の意味は基本的に「～という状態」であるが、「～的（な）N」になると、「～に類似するN」、「～におけるN」のような様々な意味関係を表す。つまり、「的」の意味は、被修飾語と複合語基の意味によって変わってくる。さらに、山下（2000）の言う「～におけるN」という意味関係の場合、「的」は助辞的な働きしか持たない。

また、品詞変換機能の内実においても違いが見られる。すべての「～性」は体言類（名詞）である。それは「性」の「性質」という体言的な意味によって決まるものである。つまり、「性」の意味に伴う品詞決定機能である。それに対して、「～的」は相言類である。しかし、「的」の意味は一定ではなく、複合語の意味はほぼ複合語基によって決まる。「的」は複合語基を状態化するという相言類に変換する機能しか持たない。つまり、品詞変換機能が「的」の主な機能となる。

以上をまとめると、「性」は意味を添加することが主たるものであり、「的」は文法的機能が主である。したがって、「的」は「性」より接辞に近い、つまり接辞性が強い、ということになる。

## 6 まとめと今後の課題

本稿では、主に規定用法である「～性（の）N」の意味を「～的（な）N」と比較して、いわゆる相言類に近い後項の「属性規定」となる「～性」は、本来の相言類である「～的」と同じであるか、また、「性」の意味と機能は「的」の意味と機能と同じであるか、という二つの問題について論じた。その結果、

1) 「～性」は「～という性質」という意味で被修飾語の属性を規定するのに  
 対して、「～的」は主に被修飾語の内容描写であり、被修飾語と様々な意味関  
 係をもつこと、2) 「～性」は完全な体言類であり、意味添加が重要であるの  
 に対して、「～的」は完全な相言類であり、品詞変換機能が主要であること、  
 3) 「的」は「性」より接辞性が強いこと、が明らかになった。

しかし、本稿の考察は「～性」の被修飾語の性質を限定する用法を出発点  
 としたため、「～的」を含む複合語の考察に関しては不十分である。また、曾  
 (2015) では「性」に「～」の品詞性による接辞性の差が存在することを指摘  
 した。「性」自体の接辞性の差と「的」との接辞性の差の関係はどうなってい  
 るのかということも問題となる。それらをすべて今後の課題とする。

## 参考文献

- 荒川清秀 (1986) 「一性 - 式 - 風」『日本語学』5-3、pp.85-91、明治書院
- 宇佐見英美子 (2001) 「接尾辞「～的」について」『津田塾大学紀要』33、pp.239-261 津  
 田塾大学紀要委員編
- 加納千恵子 (1991) 「漢字の接辞的用法に関する一考察 (3) - 「性」の品詞転換機能に  
 ついて」『文藝言語研究 言語篇』19、pp.73-84、筑波大学
- 加納千恵子 (1991) 「漢字の接辞的用法に関する一考察 (3) - 「性」の品詞転換機能に  
 ついて」『文藝言語研究 言語篇』20、pp.43-59、筑波大学
- 曾睿 (2015) 「「接辞性字音語基」の機能と接辞性-三字漢語における「性」の位置づけ  
 を通して」『文芸研究』178、pp.15-27、日本文芸研究会
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 野村雅昭 (1978) 「接辞性辞音語基の性格」『国立国語研究所報告 61 電子計算機による  
 国語研究 IX』pp.102-138、秀英出版
- 野村雅昭 (1979) 「同字異訓-字音形態素の造語機能の観点から-」『中田祝夫博士功績  
 記念国語学論集』pp.729-752、勉誠社
- 水野義道 (1985) 「接尾的要素「一性」「一化」の日中対照研究」『待兼山論叢』19 (日  
 本語学)、pp.3-19、大阪大学大学院文学研究科
- 水野義道 (1987) 「漢語系接辞の機能」『日本語学』6-2、pp.60-69、明治書院
- 山下喜代 (1999) 「字音接尾辞「的」について」『日本語研究と日本語教育』森田良行教  
 授古希記念論文集刊行会編 pp.23-38 明治書院
- 山下喜代 (2000) 「漢語系接尾辞の語形成と助辞化 -- 「的」を中心にして」『日本語学』  
 19-13、pp.52-64 明治書院

## 注

1. 三字漢語「～性／～的」の前部分（「～」の部分）となる構成要素（二字漢語ともいう）のことを言う。
2. 本稿では、語レベルのものを「名詞」「形容動詞」「動詞」「副詞」と呼び、語基レベルのものを「体言類」「相言類」「用言類」「副言類」と呼ぶ。また、自立する用法がない語基を「結合類」とする。先行研究では、「(体言)型」(野村(1978))、「(体言)系」(水野(1985))と呼ぶものもある。そのため、先行研究を紹介する際には先行研究の用語に従う。
3. 野村(1978)は、「人間性」のように、「体言類+性」で自立用法しかないものは体言類であり、「移動性の高気圧」のように、「用言類+性」でも相言類になるものもあると述べており、その点で、複合語基による「性」の品詞性変換の差は相対的なものであると指摘している。
4. 調査資料は国立国語研究所が行った現代新聞の漢字調査の資料（国立国語研究所報告 56「現代新聞の漢字」（1976）参照）である。
5. 基本的には連体用法かあるいは体言用法の一方しかいえないということである。例えば、「芸術性」・「国民性」・「人間性」は自立用法しかない、「熱帯性」・「金属性」・「植物性」は連体用法しかない。
6. 「人間性の出版社」という連体用法の用例も見られるとともに、連体用法で用いられているものの中にも、「方向性・習慣性」（用例：方向性地雷・習慣性早流産）のように、体言用法も可能であると思われるものがあったという。
7. 野村(1978)では、「性・的」のような字音形態素を「接辞性字音語基」と呼ぶ。本稿はその名称を踏襲する。
8. 野村(1978)では、Aは「体言型」であり、Bは「相言型」であり、Cは「用言型」を指す。
9. 曾(2015)で関係規定とした「～性を有するN」は、意味的に属性規定である「～性であるN」と重なってくるので、本稿では規定用法に含めて考えることとする。
10. 野村(1978)では「移動性の高気圧」、荒川(1986)では「移動性」、加納(1991)では「移動性高気圧」となっている。いずれも「移動性」を相言類であるあるいは相言類相当のものであるとしている。
11. 西山(2003)では、タイプ[A]: NP 1 と関係Rを有するNP2; タイプ[B]: NP1 であるNP2; タイプ[C] 時間領域NP1における、NP2の指示対象の断片の固定; タイプ[D]: 非飽和名詞NP2とパラメータの値NP1;
12. 先行研究では相言類としているもの。

## A Study of the Degree to Affix of 「的」 and 「性」 from the Perspective of Interchangeability

Rui ZENG

This article, from the Perspective of the Interchangeability of 「的」 and 「性」 in three-character Chinese phrase, studies: 1. Whether 【- 性】 used as attributive is an adjective which is the same as 【- 的】 , 2. Whether 【- 性】 uibutive has sed as attrthe function of modifying the attribute of the modified. The purpose is to compare the degree to affix of 「的」 and 「性」 .

The main object of study is 【- 性】 in three-character Chinese phrase used as attributive. The purpose of study is to see whether such three-character Chinese phrases exist when 「性」 is replaced by 「的」 , and, if such three-character Chinese phrases exist, what is the difference between 【- 性】 used as attributive and 「性」 . The results of study are as follows:

1. There are two kinds of relationships between 【- 性】 used as attributive and the modified. One is the relationship of essive, and the other is the relationship of modifying attribute. It seems that 【- 性】 and 【- 的】 are similar in modifying attribute, but there is essential difference 【- 性】 and 【- 的】 . 【- 性】 can form the meaning of having this one attribute when used as attributive, due to the fact that it is the attribute of noun, thus naturally forming the relationship of modifying attribute. 【- 性】 has one of the attributes that noun has to define the modified noun. 【- 的】 mainly describes the modality of the modified noun.

2. 【- 性】 used as attributive has the same meaning as 【- 性】 used independently, and also keeps the meaning of noun while forming the relationship of modifying attribute. That is to say that 【- 性】 is noun while 【- 的】 is adjective. The similarity of them used as attributive is due to the fact that 「性」 can mean the attribute of something.

The results of study show that the Chinese three-character phrase containing 【- 性】 used as attributive has the same meaning as 【- 性】 that shows possessive case, which is having this one attribute. 「性」 still shows attribute which shows no change of meaning. 【- 的】 only shows pure modality, which has no actual meaning. 【- 性】 forms a noun no matter what part of speech is the root that it follows, and this is due to the fact that 「性」 can mean the attribute of something. 「的」 has no actual meaning, it only changes the root that it follows into an adjective, thus having the function of attributive to modify noun. This shows that 「的」 is more like an affix than 「性」 .